

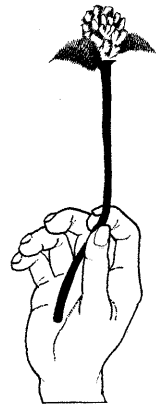
巻頭言

今、保育で

必要なことは何か

―園内研修で語り合うことから―

高杉 自子 より



ここ一二年は少年たちの思いがけない犯罪に大人、社会は振り舞わされ戸惑った。反面幼児教育・教育への関心は深まった。これはよかったかもしれないと思つたが、自己チュー児新聞記事や学校崩壊などがテレビで

放映されると、幼稚園教育要領が自由とか主体性を主張してから子どもが変わつたと言われた。しかし子どもは大人の模倣だ。社会の腐敗は進んでいると思う。食物への毒物の混入事件、贈収賄、高官の背任行為、自分の思

いが通じないと愛人まで殺すような命の尊重を無視した事件などとても暗いニュースには憂うつになる。

社会や教育のせいにして片付け結局は自分を育てることを知らず、思慮の乏しいモラルの育たない日本の土壌につきあたる。問題は自分の足もとにある。生きることの重み、生命の尊さ、多くの恵みをもらって生かされている自分に気づかず、周りを気にし欲望を満たし安易さや安楽の中にどっぷりとつかり、目に見える価値を追うあまり、人間として生きる自分が見えなくなってしまう気がする。幼児教育は量的に普及した。しかし、最も理解されていないのが幼児教育ではないか。いや、「乳幼児期の子育てが重要なのだ」と言うことが大事だと錯覚してしまったのだろうか。

しかしなぜ大事なのか、どうすればよいのか、何が何も伝わっていない。各家庭教育で受けもってきた子育ての伝承は、社会に移って切れてしまったのかもしれない。大人にとつて乳幼児期は過去であり、記憶にない。社会が受けもってくれ、子育てから解放されたことだけが有難く、「おまかせする」に自己満足した。特に戦後の幼稚園が凄まじく普及した時、「誰もがやれる教育」という最も安易な受けとめで、形だけが先行したのではないか。

「幼児だから」小学校を薄めればよい。施設さえできればよい。先生は「歌って踊ってチイパッパ」のイメージであり、テレビのおねえさんというような形が先行し保育者の本質は問われない。私の経験でも学校の都合で小学校から配置転換された時の自分の認識は

甘かった。しかし足を踏み入れたとたん、その難しさをつきつけられた。未知の世界はすばらしかった。

一旦は逃避したもののひきつけられた。

特に倉橋惣三の著書にふれて目を開かされたが、精神が伝わっていない現場にも驚いた。なぜ伝わらないのだろう。たしかにその実践は難しい。それに難しいことを拒否する体質がはびこっていく。困難に立ち向かう意欲や、未知なるものへの好奇心、チャレンジよりも過去の経験に安住してしまう。私もつい、溢れる足許の疑問の対応に追われる毎日

を反省した。

もつと、幼児教育、子育ての重要さと価値、理由と在り方を親や社会へ伝えなければ……。

まず、保育者一人一人が、自分の保育、保

育観を自分の言葉で語ることが大切ではないか。具体的な子どもの姿と、その読みとりや対応、そして自分の気持ちと「なぜ」という「問い」を、他者、特に親に投げかけることも必要なのではないか。事実からの問いと共に考え合うことこそ大切なのだ。担任まかせでなく園長も共に――。

そこで、今こそ必要なのは園内研修である。日日の保育を語り合い、自分を振り返り、保育を省察し、互いに自己を高め合うカンファレンスのすすめである。

「子どもは何を求めているか？ そのために答え得る教育とは？ 今、何を必要とされ、何を為すべきか？」を根本のテーマとし、心を開き話し合う機会を作ることが必要ではないか。ぜひ足もとから着実な歩みが続けよう。

(子どもと保育総合研究所)